
神様 に入りました。

デルジャイル

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様に入りました。

【Zコード】

Z3030Z

【作者名】

デルジャイル

【あらすじ】

ある日、願いが叶つと言つ神社に行つた、一ノ瀬冬夢。

しかし願いが叶うばかりか、神様と同居する事に…

学園モノのハーレム「メイトイー」にしたいな…と思つてます。

処女作の為、誤字脱字や矛盾など至らない点が沢山あると思つます。

もし見つかったりしたら、『報告』をしきる願いします。

第1話 巫女をなんつてマジで「神」ですよね

神様という存在が創り出されたのはいつなのだろう？

聞いておいて何だが、俺も、正確にはわからない。

だが、人類最古の宗教であるとされるユダヤ教。

あれも紀元前には広まっていたと言つ。

つまり2000年以上も前に、神様は既に創り出されていたと言つ事だ。

そこから、今に至るまで神様の力は衰える事なく人間の側にあり続けている。

日本にも、キリスト教を初めとする信者は大勢いるし、「神のみぞ知る」「困った時の神頼み」等、神の使われた言葉もある。

また、クリスマスはイエスの誕生日と言われているし、正月になれば多くの人が初詣に行く。

他にも、お守りなど神様関連の物を挙げていけばきりがない。

しかし、神様は先程言つたように、人間の創り出したモノに過ぎな

い。

絶対的な存在を創り出す事で、逃げ道を用意して安心感を得ているのだ。

そう、人間はとても弱く…

「おーーーもうそろそろ着くぞ」

「…え？ああそうか」

「どうしたんだ？ボーッとして」

「いや…何でもない」

俺…ああ、自己紹介がまだだつたな。

俺は一ノ瀬 冬夢。

私立鳳凰学園高校2年(とは言つてもまだなつて1ヶ月も経つてない)だ。

部活は…してゐ事はしてゐのだが、話すと長くなるのでまたいつか

で、横にいる空氣読めない(俺のイケてる出だしをジャマした)口

イツは役所 桐生。

俺と同じクラスで親友だ。

部活はサッカー。2年にしてエースで次期部長最有力候補である。

身長は俺と同じ位だから175前後。そして如何にも体育会系と言うような短い髪をワックスで立てている。

悔しいがイケメンである。

悔しいが彼女がいる。

しかも相手は、水泳部に所属し「人魚姫」と呼ばれ人気のある萩原真莉^{はぎわら まり}である。

桐生と萩原さんが、付き合つてると判明した時の男子達の桐生を見る目は…思い出しだけでゾッとする。

…ん?…俺に彼女がいるのかつて?
自己紹介の時に何も触れなかつただろ?
そう言つ事だ…察してくれ。

「ああ……お前みたいに彼女欲しいよ」

「何言つてんだ？お前なら彼女何ですぐだぜ？」

桐生が驚いたようにじっと見てくれる。

「……桐生……それ何のフォローにも慰めにもなってない……むしろ追撃になつてゐる」

親友と言つたりフーンスキルがなければ、俺は完全に撃沈していただろう。

「ホント……鈍いなあ……あいつらが可哀想だ……」

桐生が小さく何か呟く。

「ん？ 桐生、何か言つたか？」

「いや、何にもねーよ」

ホントは何かあるんだろうが、桐生は言わないと決めた事は絶対言わないでの、俺は素直に諦めた。

まあ、そつ言う奴だから俺は信頼しているんだけども。

「それに、願いを叶えたいなら俺に言つんじゃなくて……」

言葉を切つてニコツと笑つ。

悔しいが、男の俺から見てもカツコいい。

「IJの薬師丸神社に言つんだな。」

薬師丸神社。

学校の通学路の途中にあるのだが、小さく地味である為に気付かない生徒も多い（少し前までは、俺もその中の1人だった）。

そんな薬師丸神社には、知る人ぞ知る噂がある。

一夜に本殿で願い事をすると願いが叶う

所詮は噂なのだが、「もしかしたら…」と淡い期待を抱いてしまうのだ。

何せ、何でも願いが叶うのである。

ただ、お参りするだけで。

しかも、近くにあるのだ。

行つて損はないだらう……と言ひ結論に達し今に至る訳だ。

「よしー到ちや…」

前を行つていた桐生が急に固まつた。

「どうした？ 桐生？ 急に固ま…」

桐生の視線の先を追い、俺も同じく固まる。

「これアリかよ…」

硬直状態から解放された桐生が呟く。

俺達が見たものは…神社。
まあ、それは当然だ。
しかし…普通の神社ではなかつた。

とにかく不気味なのだ。

本殿は、とにかくボロボロで大きな嵐が起きたれば簡単に吹き飛びそうだ。

それだけでも十分に不気味なだが、今は夜なので更に不気味さが増している。

「アレがでてきても、おかしくない。アレってのは…アレだ。

口に出すのも躊躇われる。

そこ辺のお化け屋敷よりも、遙かに不気味で怖い。

「ああ…帰らないか?」

桐生が聞いてくる。

「ああ…そうだな」

こうして、俺達は普通に、何事もなく帰りましたとさ。めでたしめでたし。

このように上手くいかないのが、現実である。

俺達が回れ右して帰るうとした正にその時…

「…………」

物凄い音が本殿から聞こえてきた。

「うわあああああ！」

俺達は、自分でも驚くようなスピードで一目散に逃げ出した。

だったらどれだけ良かつたか。

もつ一度言つが、現実とは上手くいかない物である。

「えつ？」

よほど驚いたのだなつ。

桐生は俺を突き飛ばして、物凄いスピードで逃げて行つた。

おい…待てよ。

いくら何でもそれはないだろ… 仮にも親友だぞ？

掩本圖の正犯搜査

もちろん誰もいない。

あー……つまりアレですね？

悲しいかな…

捨て犬や捨て猫の気持ちが少しわかつた気がする。

今までは、見て見ぬふりをしてきたが：
これからは餌あげよ'。

…やつじやなくて。

いつの間にか俺は冷静に…いや、正確には醒めてしまった。

親友に見捨てられる程ショックな事は中々ないからな。

見捨てられたショックで頭がおかしくなっていたのかもしれない。

俺は不気味な本殿を見て不意にこいつ想つてしまつた。

「お参りしようかな

俺はお参りをする為に本殿へと向かつた。

本殿に近づいてよく見ると、確かにボロく不気味だったが、賽銭箱もテカテカい鈴も、鈴を鳴らすロープもちゃんとあった。

「こ、いらっしゃったかなあ……」

俺はお賽銭を払つべく、財布の中をチェックする。

500円。

財布の中の小銭入れにはコレだけしか入っていなかつた。

「何で500円だけしか入っていないんだよ！」

俺は一人悲しくつっこんだ。

もちろん反応してくれる人はいな…

「シャランシャラン」

風に吹かれて揺れた鈴が反応してくれた。

余計に悲しくなつたのは、俺の氣のせいではないだろう。

ところで、じつこつ時お参りを止める、と言つ選択肢が普通ならあるのだが…

俺は一度決めた事はやり遂げる主義なのだ。

フツ、俺力ツコイ…

え？

うるさい？

…さいですか…

「さりばー！俺の500円ー！」

俺は涙を飲みつつ500円を賽銭箱に入れた。

「チャリーン」

ああ…賽銭箱に入つていいく音が胸にしみる…

鈴を鳴らして、パン、パンと2回手を打ち俺は祈った。

(彼女ができますよ……)

「ガツシャーン」

俺の祈りを中断する程の、けたたましい音がして俺は慌てて皿を開ける。

「な……」

俺は思わず俺の皿を凝つた。

鈴が落ちていたのだ。

いつもまで普通に付いてたのに……俺のつっこみに反応してくれたの

……

鈴ちゃんーーん！！！

カムバーック！！！

いや…セイジやなく…。

「ヤバい…コレ…ビールよ」

鈴を持つてワタワタするものの、良い解決策が思い付く訳がなく…

俺は思い切つて…

「よし、取りあえず賽銭箱の上に置いとけ。誰か直してくれるだ
らね」

諦めて、二つか直してくれるだらう親切さんへ託した。

人生、諦めも大切だよね。うん。

「IJの行為が、一ノ瀬冬夢の平和な日常を、良い意味でも悪い意味でも、ぶち壊す事となるのだが…もちろん、この時の彼は知る由もない」

「ん? どこからともなく声が聞こえてきたような…き、気のせいだよな。そうだ、気のせいだ」

俺は賽銭箱の上に鈴をそつと置くと…ダッシュで逃げ出した。

「ハアハア…家に着いたあ」

大した距離ではないはずなのだが…

無我夢中で走ったからか息が切れていった。

ちなみに、俺の家は3階建ての自分で言うのも何だが結構広い家である。

そして俺はそこに一人で住んでいる。

親はビニールのカーテンと畳つと、世界のビニールかだ。

俺にもよくわからない。

俺が中学に入学したその日

「長年の夢だった、世界旅行に行つてくるわ。家は任せた。中学生になつたんだ。もう何でも出来るだろ?」

と言い残して行つてしまつた。

何とも無責任な親だ。

あの後しばらく、俺がどれだけ苦労したか…

あれから4年以上経つが、一度も家に帰つて来ていない。

しかし、週1で手紙と時々お土産が送られてくるので心配はしていない。

更に、月1でどこからこんな金湧いてくるんだ?、と言ひ位の大金を送つてくる。

親父とお袋の事だから、株か何かで儲けてるのだろうと…信じたい。

もちろん、そんな大金使い切れるはずもなく(使い切る氣も無いが)
俺の貯金は相当なモノとなつている。

「ただいま」

「おひ

体に染み付いた習慣とは恐ろしいもので、返事がないとわかつても無意識でただいまと言..

…ん?

イマナニカキコヒナカツタカ?

いや…あれは俺の幻聴だ。

そう信じたい。

それはそれで問題だが、最悪のパターンよりは遙かにマシだ。

俺は恐る恐るむつー一度言った。

「た、ただい、ま」

「おひ」

オンナダ…

オ… オンナガイル

叫びたい気持ちをグッと堪えて、俺は声のしたリビングへ向かった。

「う…うわああああああーーー！」

そこにいたのは、巫女だった。

長い黒髪が印象的な、キレイな巫女だった。

しかも、人の家のテレビ勝手に見てやがる。

何て失礼な奴だ。

けしからん。

いや……落ち着け俺。

着用するポイントがずれてるぞ。

問題は巫女がここにいる事だ。

まさか……鈴を落としたからここにやってきたんじゃ

俺はとうとう行動に移した。

「すいませんでした！」

全力で土下座した。
全力で謝った。

「な……何で謝るのだ？」

巫女の驚いた声がした。
俺は恐る恐る顔を上げる。

巫女はこいつを見て、田を丸くしていた。

「え……いや……」

俺は神社での事を説明した。
もちろん、土下座のままで、だ。

俺が説明すると、巫女は豪快に笑い始めた。

「ハハハハ。別にあんな些細な事で怒る程、私は器の狭い神ではないぞ。それに、もともとボロかつたからな。仕方のない事だ」

「そうですか。それを聞いて安し…ん？」

俺の耳が正常であれば、この巫女、恐ろしい事をサラッと言つたぞ。

「あの…巫女さん？」

俺は土下座を止めて、立ち上がる。

「巫女さんとは何だ。私にも音尾 和^{おとお}_{なこみ}と言つ名前があるぞ。」

「じゃ…音尾さん？」

「何だ？」

「さつき自分が神つて言いましたか？」

俺は、音尾さんが否定する事を祈つた。

正に、神頼みである。

「ああ、言つたぞ。私は薬師丸神社の神だ。そして今日からここでお前と一緒に暮らす事となつた。宜しく頼む」

「八八」
八八八八八

予想の遙か斜めを行き過ぎた発言がおまけでくつ付いてきて、俺の

「ねこー・冬夢ー・どうしたんだ! しつかりしふー・タ夢ー。」

やつ頭の中でシッコリながら、意識は薄れていった。
…何で俺のことが前知ってるんだよ。

第一話 巫女むすめ「マジック」神 ですかね（後書き）

まずは、お読み頂きありがとうございます。

どうも始めまして。

デルジャイルと申します。

処女作の為、誤字脱字や矛盾点など至らない点が沢山あると思いま
す。

その様な点を見つけられましたら、『報告をお願いします。

第02話 神様だからって、何でもできると思わないよ！」

「ん…」

あれ…何で俺ソファーで寝てるんだ？

起き上がって、必死に記憶を引っ張り出す。

確か…薬師丸神社から帰ってきて…
えっと…それから…

何か肝心な事を忘れている気がするのだが、どうしても思い出せない。

と言つよりも、頭が思い出すのを嫌がつてゐる感じだ。

「のわ——。」

唐突に、台所から悲鳴が聞こえてきた。

…はいはい、思い出しましたよ。

音尾さんって言うのが、自分の事を神だと言い張るわ、更にここで暮らすと言い出すわ、で俺の脳の処理能力が限界を超えちまつたんだな。

「け、煙がー黒い煙がーどうすればいいのだーー！」

どつしてだろう、嫌な予感しかしない。
聞こえてないふりして、また寝ようかとも思つ。

(しかし、ここで放置するのは男としてどうだ?)

と、急にもう一人の俺が聞いてくる。

「… そうだよな、行くしかないよな。」

（そうだ。それでこそ男、一ノ瀬冬夢だ）

いや、勘違いするな。もう一人の俺。
俺が台所に行くのは…

「だ、誰か！？ 助けてくれ！？」

「これ以上放置すると、家を破壊されかねないからだ。」

（… 確かにな）

「だろ？ もう一人の俺。」

ダッシュで走つて台所の入口で大声で叫ぶ。

「おい、音尾！ お前何やつてんだ！ 大丈夫か？」

丁寧語？

んなもん、大氣圏外に打ち上げてきたさ。

「ど…冬夢～！」

音尾が、抱きついてきた。

目がウルウルで半泣き状態である。

いつもなら、喜べるシチュエーションだつが今はそんな場合ではない。

家が下手すりやなくなるかもしれないのだ。

強く抱きついてくる音尾をビリビリかじけて、キッチンの中に入る。

何があつたのかは、すぐにわかつた。

土鍋で何か調理していく、焦がしたようだ。

黒い煙がもうもうと上がっている。

俺は急いで火を切つて、土鍋を掻む。

「熱いつ！」

思わず手を離しそうになつたが、グッと堪えて流し台に入れ、水をぶつかける。

ジュツと音と共に水蒸気が土鍋からあがる。

「ま、間に合つた」

俺はその場にペタリと座り込んだ。
緊張の糸が切れ、ドッと疲れが押し寄せてきたのだ。
良くやつたぞ、俺。

家を危機を良く守つた！

神様もきっと見て下さつて、御褒美を…

あ、神様ここにいた。

しかも、この危機の元凶だし。

「だ、大丈夫か？」

音尾もとい元凶が走つてこっちにやって来る。

「ああ、何とか…痛つ！」

興奮が収まつたからか、熱々の土鍋を掘んで負つた火傷が痛み始めた。

「おい冬夢ーお前怪我してるだろ！見せてみろー！」

音尾が俺の手を取る。

「」
「」

そう言つて、俺は音尾の手を振り解こうとしたが激痛で動かせなかつた。

「馬鹿者が、火傷しているではないか。」

そう言つて、音尾は目を瞑り何か一言一言呟いた。

すると、俺の手は淡い光に包まれた。
何だか温かい。

「何だよコレは？」

「治癒の呪文だ」

「治癒？」

「さうだ。ほら、見て見ろ、治つてるだろ」

「本当だ…」

光が消え、再び現れた俺の手に火傷はなかつた。
そして、いつの間にか痛みも消えていた。

「…お前…神様みたいなヤツだな

「みたい…ではなく私は神だ！」

あ、そうだった。神様らしくないからすっかり忘れてた。

「…すまん…」

「な、何だ？」

急に何の前触れもなく、音尾が土下座してきた。

俺は驚いて呆気にとられた。

さつきの音尾の気持ちがよくわかる。

土下座はそう簡単ににするもんじゃない。

いや……やつじやなくて。

「わかつたから、いや本当はわからぬけれど、取り合へず立つてく
れ。話はその後だ」

「え……おひ……」

「急に土下座なんかして、どうしたんだ?」

「勝手に押し掛けで、役に立つ所か迷惑かけて、冬夢に迷惑我ままでさ
せて。本当にすまない。こんな奴と一緒に住みたくないよな?
……いや、言わないでもわかる。嫌だよな」

いやこち……おひとおひとおひと。

お姉さんや。

いつ住むつい事が決まつたよ。

しかし、そんな事をこの場で「つっかり口にするほど俺も馬鹿ではない。

それに俺はそこまで迷惑とは感じてなかつた。
別に台所が丸焦げになつた訳でなく、土鍋が一つ使えなくなつただけだ。

大した損害ではない。
それに火傷も治してくれた。

お人好しすぎるかもしれないが、俺の本心なのだから仕方ない。

だが、一緒に住むつて言つのはなあ。
一応俺だって健全な高2である訳だし。

こんなキレイな女の子と一緒に住むのは、精神的にぐるモノがある
と言つたか、何と言つたか。

「流石に一緒に住むつてのはなあ…ってあれ? 音尾?..」

いつの間にか、音尾はキッチンから姿を消していた。

「おーい音尾ー。つておー! 何してんだ!」

音尾は玄関のドアを開け、出て行こうとしている所であった。

「これ以上迷惑はかけられない。だから出て行く

「出て行く？薬師丸神社に帰るのか？」

俺がそう聞くと、音尾は弱々しく首を横に振った。

「色々あってな。あそこには戻りたくないのだ

「じゃ、ビーするんだよ？何かどつかにあてでもあるのか？」

再び音尾は首を横に振った。

そうやつて首を振る音尾の顔は、見ていくつちが辛くなる程悲しそうな顔をしていた。

「本当に短い間だがあせ話をこなつた

そう言って、音尾は出て行った。
ドアの閉まる音が、頭に強く響く。

(「のまままで本当にいいのか？」)

もう一人の俺が、話しかけてきた。

「うわーい。わかんないんだよ。

(ナウに聞こても、音尾は行ってしまった)

そんなの、わかってる。
だけど…

(なあ、俺。行動しないで後悔する位なり、行動して後悔しない。それが何を言えは出てこるだろ?)

ああ、あんな悲しそうな顔をした女の子を放つてはおけない。

俺は靴も履かずに家を飛び出した。

「おーーー音尾ーー!!」だー!

思い切り叫び、辺りを見渡す。

そこまで時間は経っていないから、遠く行か

「いたー!」

100m位離れた所に音尾の姿を確認する。

俺は、全力で走って音尾の腕を掴んだ。

「と、冬夢ー、びつしたんだー。」

本気で驚いたらしく、田を大きく見開いている。

「音尾ー、びつしたんだよ？お前の家はあそこだろ。」

そう言って俺は自分の家を指差した。

「こんな時間に一人で歩き回るのは感心しないよ。ああ、帰るぞ」

「い、良いのか？あんなに迷惑をかけたのだがっ。」

「あんなの迷惑の内に入らねえよ。ほり、早く帰らうぜ」

「せうか…冬夢…ありがとう、ありがとう」

そう言ひて、音尾は俺にギュッと抱きついてきた。

つまり、2つの凶器が押し当たられる訳で。

…「わ…柔らかい…。

しかも…デカい…。

い、生きてて良かったーーーーー！

つて、そつちに意識を集中してどうする！

折角の感動シーンが台無しになるだろ！

しつかりしろ！俺！

理性を総動員して何とか意識を凶器ではなく音尾本人に戻す事に成功する。

もう少しで、別次元にトリップする所だった。危ない、危な…ん？

音尾の顔を見て、俺はある事に気が付いた。

「お前、泣いてるのか？」

「な……泣い……てな……い……い……ない」

「泣くな泣くな。俺、温つけの手なんだよ」

「だか……ら私は……泣いてい……ない……」

「わかった。わかった。そう言つ事にしておいてやるよ。それより、晩ご飯まだだろ？ちょっと遅いけど、今日は盛大に歓迎パーティーしてやるよー料理には自信あるんだ。音尾の好きな食べ物、材料あつたら作ってやるから。だから、こんな所で泣いてないで帰ろう」

「本当か！私は鳥の唐揚げが食べたいぞ！」

そう言って、音尾は笑った。

単純な奴だ。わざわざまで泣いていたのに。

でも、女の子に泣き顔なんか似合わない。

やつぱり、女の子には笑顔が一番似合ひ。

第〇二話 神様だから、何でもやれると思わなこよひ（後書き）

誤字脱字や矛盾点などありましたら、「報告よりおこへお願ひします。」

また、感想などもお待ちしております。

第〇三話 大好物はね、鳥の唐揚げ。更に音尾がおかんの作る以下略。

「えーと、鶏肉、鶏肉…お、あつたあつた」

俺は、冷蔵庫から鶏もも肉を取り出す。
本当は照り焼きにする予定だったのだが、音尾のコクエストで唐揚
げに変更となつた。

「あ、そつだ。おーい、音尾！」

クイズ番組をジッと見ている、音尾に声をかける。

「なんだー？」

そつ音つて、音尾は台所にノコノコとやつて來た。

ん、ちゃんとトレーニングしてこちに来てるじゃないか。

成長が見れてお兄さんは嬉しいぞ。

「暇なら、お前の焦がした土鍋捨てといてくれないか？」

「それよつ…冬夢よ、今何が失礼な事考えてなかつたか？」

「い、いやそんな事ないぞ？何言つてるんだ」

おいおい、何でわかつたんだ？

まさか、心を読んでるとか…

いやいや、よく考えてみろ俺。

もし心を読めるなら、迷惑だと思つて出て行いつとしたのが説明できな
いじゃないか。

だから、音尾は人のこのは読めない

…はずだ。

「…まあいい。散らかしたもののは、責任持つて片付けないとけな

いからな。放つておいてすまん

「いやいや、別に大丈夫だ。それより、音尾。お前何を作ろうとしてたんだ？」

「！！！」

土鍋を流し台から引き上げようとしていた手が、ピタリと止まった。
そして、なぜか顔も真っ赤だ。

まさか、怒つてらつしやる？

やっぱり、失敗を掘り返されるのは嫌だつたか？
機嫌を直すには……どーすりやいーんだ??

頭を撫でるか？

いや、それは火に油を注ぐだけだ。

じゃあ、胸を揉むか？

つて、おい！

そんなの、火に油どころか火に二トログリセリンだろー！

俺の命が消えてしまう。

そんな事、すぐわかるだろー！

この変態脳が！

あー…何か良い解決策は…

「…粥…」

「え？」

音尾が何か言つたようだが、音尾の声が小さく俺自身、考え込んでいたので聞き取る事ができなかつた。

「粥だ！…！」

「粥？？？」

えーっと、粥つて…」飯に水入れてトロトロになるまで煮込んで塩で味付けする、あの粥だよな？

つて言うか、粥つてそれしかねーじやん。

どーやって、黒い煙があがるまで焦がすんだ？

とても常人の…いや、常神のやる事とは思えない。

「音尾、お前お粥好きなのか？」

「ち、違う。自分の為に作ったのではない。…その…冬夢…の為に

…」

「お、俺の為？」

「その… 急に倒れただろ？だから心配してな… 作らうと思つたんだ。結局、失敗してしまつたがな」

「心配してくれてありがとうな。俺、本当に嬉しこよ」

「あつ…えへへへ」

俺は嬉しさの余り無意識の中に、音尾の頭を撫でていた。

うわっ！髪の毛サラサラ！

いつまでも、撫でていたくなる気持ちよさである。

撫でた後に、怒られるんじゃないかと心配したが、音尾は嬉しそうに笑うだけで、抵抗してこなかつた。

なるほど、犬が好きな人の気持ちもわかるな。

「と、冬夢…いつまで撫でている…つもりだ？」

「おお、悪い悪い。もしかして、嫌だったか？それだったら、ごめんな」

「べ、別にい、嫌とは言つてない。ただ、あれ以上やられるとだな

…」

「やられると？」

「な、何でもないっ！ほら、早く唐揚げを作るぞ！私も手伝える事は手伝う」

続きをが気になつたが、音尾は言つてくれそつともなかつたので諦めて、調理に取りかかつた。

ちなみに、音尾には皿運びなどの雑務をして貰つた。

落ち込んでいたが、仕方ない事だ。

いつへマして、大惨事になるかわかつたものじやないからな。

何事も安全第一である。

「こんなに美味しい唐揚げは、初めてだ！」

そう言つて、音尾は次々と唐揚げを頬張つていく。

やつぱり、自分の作つた料理を誰かが美味しいって言つて食べてくられるのは、嬉しいね。

次も美味しいものを作つてやろひ、って言つ意欲が湧く。

「そーいや、神社ではどうこう生活してたんだ？」

神様の日常生活が気になつて、音尾に聞く。

「言つておくが、あそこは私の家ではない。職場だ。」

「職場つてお前、働いてるのか？」

「ああ。大体、10歳過ぎれば皆働き始める。私も10歳から働き始めてるから、今年で7年目だな」

「10歳から？労働基準法も真っ青だな。
…神様に生まれなくてよかつた。一度きりの10代を仕事で潰されではたまらない。

「お前17歳なのか？神様だから何百歳とかだと思ってた」

実際、俺の知ってる神様（とは言つても、マンガやドラマなどで見たものだ）は、みんなとんでもなく年寄りだった。

「冬夢、お前中々失礼だな…。まあいい。そうだ。冬夢と同じ17歳だ。神様にも位があつてな、私のような下級神は人間と同じように年もどる。それに、特殊能力も凄いものは使えない。イエス様やブッダ様のような究極神は、不老不死で心を読むなどの凄い能力も使えるがな」

やはり音尾は、心を読めないんだな。
よかつた、よかつた。

「神様つてのは、みんながみんな凄い能力を使え、何百歳だの何千

歳だのとんでもない年寄りだと思つていたが、そつでもないんだな

「それは、人間の勝手な想像だ。神だつて人間とほぼ同じだ。階級が高いと話は別だがな」

そう言って、唐揚げを食べる音尾は、確かにどこからどう見ても普通にカワいい女の子だ。

「神様の仕事ってなんなんだ？やつぱり、人の願いを叶えるとかか？」

「それは上級神以上の仕事だ。基本的には、魂の誘導とか罰を与えないければいけない人間がいかが、調べたりとかだな。」

「罰は何となくわかるけど、魂の誘導？」

「天国や地獄は広くてややこしいからな。魂を、ちゃんと目的の場所へ連れて行く事が仕事なんだ」

天国も地獄も本当にあるんだな。是非とも宗教学者に聞かせてやりたいものだ。きっと驚くだろうな…まあ、普通誰でも驚くか。それ以前に、神様が実在する事に驚くだろうけど。

「音尾の仕事は何なんだ？」

「私は、上級神のサポートだ。」の前まではな

「ん？この前まで？じゃ、今は何やつてんだ？」

「知らないのか？お前の生活のサポートだ」

え？俺のサポート？

俺はそんな事頼んだ覚えはないぞ？

「どうやら聞かされてないようだな。これは冬夢の御両親からの依頼だぞ？」

ああ、なるほどね。俺の親が。道理で音尾が俺の名前を知つてた訳だ。
それなら納得

…できるかーー！

「お、俺の親父とお袋が？何で神様と知り合いなんだ？」

俺が聞くと、音尾は呆れたようにじらを見てきた。

「冬夢、お前本当に何も知らないんだな。お前の御両親は、世界中

を回つてそこの神のサポートをしてるんだ。人間の助けがないと、出来ない事もあるからな。こつちでは、知らない人はいないぞ」

「そりや、世界中飛び回つても、大金が入る訳だ。何せ、神様のお手伝いだからな。

しかし、息子にも仕事を教えないってどうよ。

今度帰つてきたら、問いつめてやるわ。

「この4年以上もの間、一度も帰つてきてないけど。

だんだん顔も思い出せなくなつてきている。

いつ帰つてくるのや、ら…

「お前、俺の親に何て言われたんだ？」

「私は、直接聞いてない。ただ、薬師丸神社から誰か一人冬夢の生活のサポートに行ってくれ、と言う指令が上から出てな。私が立候補して来たんだ。何せ、神社に行かなくていいからな」

「そーいや、神社に戻りたくないとか言つていたな。何があるのか

？」

「えつと…それはだな」

言つてくせうに、口のむる音尾。それでも箸はしつかり唐揚げを掴んでいる。

：唐揚げ食い過ぎだ。他のも食えよ。

俺のがなくなる。

「別に言いたくないんなら、言わなくていいぞ。隠しておきたい事は誰にでもあるよな」

「言つても言わなくとも、いずれ知られるだろ？から言つておく。聞いて驚くなよ」

「わかった。絶対驚かない」

俺が頷くと、音尾は暫く間をおいて言つた。

「実は私は、私は求婚されたのだ！当然、断つたのだがそれでもしつこくてな。それでここに逃げる為に来たわけだ」

なぜか誇らしげに、立派な胸を張る音尾。

俺にしては、目の保養になるから一向に構わないんだけども。いや、むしろもつとやつて頂きたい。

保養をし過ぎて、悪い事はないからな。

もちろん、死んでも口には出せ……何らかの理由で死ぬ間際なり言つかもしれないな。

つて、何を言つてんだ俺。

考へてる事が残念過ぎるわ。

そんなこんなで、現実世界に戻つてくると、音尾は、俺をジック見つめてきていた。なぜか、田には期待の色が浮かんでいる。

理由がわからず、俺も見つめ返す。

すると音尾は、なぜか田をそらしてしまつた。
顔が少し赤い気がしないでもないが、気のせいだろう。

赤くなる理由が見当たらぬからな。

「な、何で驚かないんだ！」

音尾は暫く黙つていたが、何の前触れもなく急に怒鳴つてきた。

「ぬおつ？」

完全に不意をつかれて、俺は変な声を上げてしまつ。

「急にびびつしたんだ？」

「どうせひりもないー。」

「…と云つて…」

「何で驚かない？」

音尾は椅子から立ち上がって聞いてきた。

なるほど。やつきの田の理由がわかった。俺が驚く事を期待してたのか。

「だつて、今日は色々と驚く事がありすぎからな。もつつか少の事では驚かない」

ちなみに、全部この前にいるお方関連である。

「…確かに…そうだな」

「それに、音尾はキレイだからな。あり得ない事ではないだろ。告白じゃなくて、求婚ってのは少し驚いたけど」

「な、な、な、な」

音尾は、顔を真っ赤にして口を金魚みたいにパクパクさせ始めた。

「…とりあえず、落ち着きなよ。ほら、水」

俺はその金魚っぷりを十分に堪能してから、コップに水を入れて渡

す。

音尾はそれを一気に飲み干し、深呼吸を一つ。

「もう大丈夫だ」

流刃神様である。立ち直るのが早い。
さつきまでの、金魚つぶりが嘘みたいだ。

「何で、あんなに慌ててたんだ？」

「や、それはだな……」

「うそ」

「それは…好」

「もしかして、面と向かってキレイと言われて、恥ずかしかったのか？」

「…………」

せつまつて、箸をテーブルに叩き付け音尾は席を立つた。

なぜか物凄く機嫌が悪そうだった。

：何か悪い事したかなあ。

この間にかからっぽになっていた、音尾の皿をボーッと眺めながら自分の言動を思い起こしてみたが、理由は最後までわからなかつた。

後、音尾…

食べた皿は、キチンと自分で下げるってくれよ。

「ふ、お兄さんとの約束な。

第03話 大好物はね、鳥の唐揚げ。更に言へばおかんの作る以下略。（後書き）

誤字脱字や矛盾点などありましたら、「」報告よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第04話 謝罪のスマメ

「本当に悪かつた。許してくれ」

「……」

返事はない。

「頼むよ。俺が悪かつたから」

「……」

また返事はない。

俺は心の中でため息を付く。

かれこれ、10分以上謝り続けている。
しかし進展は全くない。

音尾は自分の部屋（驚くべき事に、音尾は俺の部屋の、隣の空き部屋を既に、そして勝手に自分の部屋にしていた）に閉じこもって、出でこない。

しかも、1J十一寧ニアに

「入るな！」「

と書き殴った紙が、張り付けてある。

「この状況をどうやって乗り切ればいいんだ？」

「あ……桐生なら、アドバイスくれるかも」

善は急げ、である。

俺は、携帯を取り出して、アドレス帳から桐生を選び出し電話をかけた。

「あ、桐生？ もしも……」

「冬夢、悪い……」

いきなり謝られて、俺は返事に詰まつた。

何か、今日ほほ謝つて謝られてばかりだな。

「どうした？ 桐生？」

「いや……お前を置いて帰つてしまつただろ？」

「ああ……」

余りにも色々とありますから、すっかり忘れていた。

やられた時は、結構傷ついたけれども。

「別に気にしないよ」

「本当か？それを聞いて安心したぜ。で、どうした？」

「ちょっと、相談したい事があつて。今いいか？」

「ああ、全然大丈夫だ。しかし、冬夢が相談とは珍しいな。好きな子でもできたか？」

「だつたらいいんだけどな。実は、女の子を滅茶苦茶怒らせてしまつてさ、メールも電話も無視状態なんだよ。どうすればいいかわからなくて…助けてくれ」

もちろん、相手が神であるとか、一緒に家にいるなどは伏せている。説明が面倒だし、信じてもらえない可能性だってあるからだ。

「なるほどな。つまり冬夢は、その子と仲直りしたいんだな？」

「ああ、そうだ」

仮にも、一緒に暮らすのだ。

こんな空氣じや、精神が參つてしまつのも時間の問題である。

「なら、取引だな」

「取引？」

「やうだ。一つ句でも三つ事を聞いてやれ。その代わり、許して貰うんだ」

「…ベタだな」

「ベタだから、効果があるんだよ」

確かにそうだな。効果があるからこそ、一般に定着する訳だし。

「ありがと。早く、やってみる」

「ああ、健闘を祈る」

俺は、携帯をしまい、ドアに向き直る。

「あのー、音尾さん？」

「……」

当然、反応はない。

「一つ何でも音尾の言ひ事聞くから、許してくれないか？」

桐生の言つていた方法を実行する。
ホントに効果あるのか？

「…それは、本当か？」

なんと音尾が反応してくれた。

あつがとつあつがとつ、桐生。

今度、ジコースでも斬つてやうなけれど。

しかしここからだ。

音尾と仲直りしないと意味ない。

「ああ、もううんだ。何でも聞いてやる」

やつまつと、部屋のドアがバツと開いて音尾が出てきた。

「本当かっ……」

やつまつで、うそともすんとも言わなかつた音尾をこんなにも簡単に部屋から出すとせ。

しかも、笑顔である。

ベタの力は、伊達じゃない！

「ああ、もううんだ。ただ、さつきの俺の不始末を許してくれるなら

うな

「ねー。あれは、私も怒りすぎた。すまん」

おお、許して貰えるだけでなく、あつからも謝つてきた。

やはり、ベタの力は、以下略。

しかし、どうしてだらり〜。

目の前で笑っている音尾を見ると、胸騒ぎがする。

コイツはヤバい、と直感が知らせてくる。

…あ…あああああああー！

気付いてしまった。

気付きたくないのに、気付いてしまった。

…何でも直つ事を聞いてやる…つまり、どんな事を要求されても俺に拒否権はないのだ。

「う、どんな事を要求されても…」

嫌だあああああああ！－！－！

俺、まだ死にたくない！！！

まだ青春を十分に謳歌できていないのに！
彼女できてないのに！！

「ソニーで死ぬ訳にはいかないんだあ！」

「あの…音尾さん？」

「ん? 何だ?」

「さつき、何でも言う事聞いてやるって言いましたけど、流石に何

「何だと？」

「だから、流石に何で…」

「何だ？聞こえんなあ？」

…怖い！怖すぎるー。

笑顔だけど、目が…目が笑ってない。

それに声にも凄みがある。

これ以上言つたら、俺絶対に殺される。

ん？ちょっと待て。

つて事は…八方塞がりじやないか。

どっちに行つても、待つてているのは死。

ああ…神様助け…

つて神様ここにいるし。

こんな展開、前にもあったような…『ジヤヴか？

いや、実際あつた…しかもわつわ。

音尾、本当は神様なんかじゃなくて、疫病神なんじゃ…

つて、疫病神も神様だつたな。

「では、頼みを言ひなさい」

「あ、ああ」

ええい！

こうなれば、どんなに恐ろしい頼みがきても、乗り越えて見せよう
じゃないか！

さあ、来い音尾…！

漢、一ノ瀬 冬夢。

全てを受け止める！

「そ、その、私の事を名前で呼べ…！」

「…く？」

な、名前で呼ぶ？

そ、そんな簡単な事で、いいんですか？

何て優しいお方なんだ！

わつき、疫病神なんて言つて「めんなさい」。

あなた様の事、滅茶苦茶疑つてしまつて「めんなさい」。

あなた様は女神様です。

優しさで出来てる女神様です。

「え？、とは何だ！な、何でも言つ事を聞くと言つただろー。」

「ああ、悪い悪い。その…和」

名前で呼ぶ位、簡単だと思っていたが、いざ呼んでみると意外と氣恥ずかしい。

まあ、死ぬよりはマシか。

「もう一度呼んでくれ」

「和」

「えへ…えへへへ」

名前で呼んで貢うのが、そんなに嬉しいのだろうか。

和は、幸せそうに笑っていた。

よくわからないな。女の子って言つ生き物は。

まあ、仲直りできたので、別にいいんだけど。

「そーいえば、和」

前々から、気になる事があつたのでこの際聞いてみる。

「お前、巫女服以外の服持ってるのか?」

和は食事の時も

「当たり前だ。ただ、着替える暇がなかつただけだ。ちょっと待て。
着替えてくる」

そう言って、和は部屋の中に戻つていった。

和の私服かあ。俺の予想では、性格から見て、部屋着はジャージだ
な。

いや、意外に着物とか…。

「どうだ！」

「おお」

和の服装は、ジャージでもなければ、着物でもなく…

英語が書かれている白のTシャツに、黒いパンツといつ、平凡な、
どこにでもある服装だつた。

しかし、それを和は、上手く着こなしていた。

ハテに着飾つているそこら辺の変なモデルより、全然キレイである。

流石神様…いや、神様は関係ないか。

「他には何持つてきたんだ?」

「衣服類以外は……ケータイと財布と通帳位だな

「ケータイ持つてるのか?」

「当たり前だ。あんな便利なものを使わない訳がないだろ?」

神様がケータイを使うとは……俺の頭の中の神様像がどんどん変わつていくなあ。

「まあいいや。とりあえず、必要な物の中で、家で揃える物は揃えよう。で、足りない物……例えば家具とかは、土日に買いに行こう。だから、今日明日の2日は悪いけど、我慢してくれないか?」

「もちろんだ。二つちは住ませて貰う身だしな。それより、冬夢

「…」

「ん? どした?」

「その……買い物は一人で行くのか?」

「俺はそのつもりだけど、誰か一緒に行きたい人でもいるの?」

「いや、そうじゃない。ただ確認しただけだ。……一人で買い物か?」

えへへへ

「??」

買い物するだけなのに、何あんなに嬉しそうなんだ？

デートじゃあるまいし。

…考えれば考える程、謎は深まっていくばかりである。

「まあいいか。和、風呂入つてないだろ？俺はもう遅いし疲れて眠いから、明日の朝入るけど、和は今入るか？」

「ああ、シャワーを使わせてくれ」

「その代わり、俺はもう寝るから、全部の部屋の電気消しといってくれ。ああ後、バスタオルは洗面台の左下の棚に、ドライヤーはバスタオルの棚の一つ上の棚に入ってる。バスタオルは、使ったら洗濯機の中に入れといてくれ。布団は部屋の押し入れに入ってるから、自分で敷いてくれ」

「わかった」

「じゃ、おやすみ

「おやすみ」

いっしょで、神様と一緒に暮らすと言つ、新たな生活がスタートした。

第04話 謝罪のスマ（後書き）

誤字脱字や矛盾点などありましたら、『報告』をお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第5話 平和なんてモノは、所詮ハリボテ作りでしかない事を忘れるな（前書き）

ヒロイン2人目登場です。

第5話 平和なんてモノは、所詮ハリボテ作りでしかない事を忘れるな

「ん…ふあーあ…今何時だ?」

俺は、枕横に置いてある時計を確認する。

5時30分。

普通の学生なら、「まだ寝れるじゃないか」と安堵し、夢の中に再突入するだろうが、俺の場合、残念ながらそういうはいかない。

何せ、親がないのだ。

つまり、朝ご飯を作り、更に学校で食べる昼の弁当も俺が作らなくてはならない。

他にも、朝の内に済ませておきたい家事もある。

高校生兼主夫の生活は忙しいのだ。

だから、この時間に起きないと、間に合わない。

最初の方（つまり、中学1年の時）は、起きるのが辛くて仕方がな

かつたが、今では田舎まじめで5時半に起られる。

俺の数少ない、皿焼できるモノの一つだ。

ん？

…地味過ぎる？

…まつとナ…

「今日から、ご飯2人前作らないといけないんだな。そーいや、あいつ…洋食食べるのか？聞いとけばよかつたな

それなら今日の朝食は、塩鮭と漬け物と味噌汁と納豆にご飯でいいかなあ、などと献立を考えつつ台所に向かった。

「おはよー」

「ん、おはよー。何だ、もつ起きたのか? もつとゆくべつ寝てると
思つてた」

6時半過ぎになつて、和が起きてきた。

神様だからか知らないが、眠氣と言ひモノを微塵も感じさせず、シャキッとしている。

「実は、朝早くから行かなればならない場所があつてな。」

「へえー。どこに行くんだ?」

俺は、席に着いた和の前に、朝ご飯（最初予定していた献立に出汁巻き卵を追加）を出しながら聞く。

「まあ、色々あるのだ。何、冬夢には後々わかる事だ。そんな事より冬夢、もう食べていいか? こんなご馳走を目の前にして、お預け

は拷問に等しい

「あ、ああ。悪い、食べてくれ」

何か、物凄く意味深な発言をしたよつた気がするが…。

皿をキラキラと輝かせ、俺の作った朝ご飯を凝視している和にこれ以上聞くのは無理だと判断した俺は、和に食べるよつ促す。

しかし、じこまで俺の作ったご飯を褒めてくれるとは…。

嬉しいを通り越して、もはや恥ずかしい。

「 いただきます! 」

和は、やつ言つや否や勢いよく「ご飯を食べ始めた。

いやー、勢いよく「飯を食べる女の子っていいよね。

見ている口рошまで食欲が湧いてくる。

食べていこるのが女の子じゃなくて、『テフ』な男だつたら…

あら不思議。一瞬で食欲がなくなるのだから、世の中は、意外と残酷だ。

「そーいや、和」

食事が終わり、食器を台所に運んでいる和に声をかける。

「ん? どうした?」

「食洗機の横に弁当あるだろ?」

「ああ。青いのと黄色いのと2つある。それがどうしたのだ?」

「いや、昨日和が匂い」飯どうするか聞くの忘れてたから和の分の弁当もとりあえず作つといったんだ。よかつたら、持つて行つてくれ。和のは黄色い弁当の方だから」

「ほ、本当に持つて行つていいのか?」

「ああ。もちろん。逆に持つて行つてくれた方が嬉しい。残すのは持つたいないからな」

「そうか。えへへへ…冬夢の手作り弁当かあ…えへへへへ

台所にいるので、顔はわからないが声からして、どうやら喜んで貰えたようだ。

朝早くから作った甲斐があつたつてもんだ。

「ありがとうな。冬夢。大変だつただろう?弁当作るのは

「いや、全然大丈夫」

「そうか。本当にありがとうな」

そつ言つて和は、そのまま一階に上がつて行つた。

「さて、俺もそろそろ学校に行くかな

ぼーっと見ていたテレビを消して立ち上がる。

ちなみに、和はあの後すぐに出かけて行つた。

はたして、何しに行つたんだろうな

1番可能性として高いのは、神社だらうが神社には戻りたくないと言つていたしな。

まあいいや。

夜にでも聞いてみるか。

「この時の一ノ瀬冬夢はまだ知らない。日常の崩壊が既にスタートしている事に…」

「…何か声が聞こえた様な気がしないでもないが…まあいいや。学校行こう

「おーっす。桐生」

教室に入った（ちなみにB組である）俺は、まず桐生に声をかける。

昨日のお礼をする為だ。

もし桐生のアドバイスがなかつたら…今頃俺はあの氣まずい空気に耐えきれなくなつて精神を病んでたに違ひない。

それだけ、あの時の空気は重かつたのだ。

神様恐るべし？

…いや…神様関係ないか。

「よつ、冬夢。悪かつたな。昨日は」

「いや、大丈夫。もう氣にしてない。それよりありがとうな。お前のアドバイス通りにやつたら仲直りできた」

「それは良かった。で、相手は何を要求してきたんだ？」

「それが、意外も意外でな。名前で呼んでくれ、って要求されたん

だ。あまりに簡単な要求で思わず驚いてしまったよ

俺がそういつと、桐生は大きく溜息をついた。

え？ なんで？

溜息をつくような内容か？

「… 夢、もはやそこまでへるとわざとこしか思えなこだ」

「え？ なにが？ なにが？」

慌ててそう聞くも、桐生は苦笑にするだけで何も答えてくれなかつた。

「やつぱりか…」

俺は諦めて自分の席に向かつ。

前にも言つたと思つが、あいつの口の硬さは尋常ではないのだ。

昔、中学生の時に桐生の好きな人を知ろうとして、くすぐった事があるのだが口を割ろうとせず、俺がくすぐり疲れて負けたと言つ事があつた。

まつたく…スークかよ…

「おはよー冬夢！」

「ああ。おはよ、美都」

自分の席に座ると、横の席の榎本えのもと美都みとがあいさつをしてくる。

榎本 美都。こいつは幼稚園からの幼馴染（ちなみに家は近所である）で、バスケ部に所属し、エースとして活躍している。また、頭も良く見た目も物凄くイイ為、男子から物凄く人気がある。

告白する人も後は絶たないらしいが、俺の知る限りでは未だ成功率0%。

性格はややキツめだが、男子いわくそれがツインテールとマッチして最高なんだとか。

「ねえねえ、冬夢。今日ウチのクラスに転入生がくるんだってー。知つてた？」

「いや、知らなかつた。にしても、こんな時期に転入とは中途半端だな」

「そうね。急な転勤とかかなあ？どんな子が来るか楽しみよね」

「俺的には、女の子がいいなー。それもカワイイ子やキレイな子。つて、美都？どうした？急に席立つて」

「用事を思い出したのよーフンッ」

そう言つて美都は教室の外に行つてしまつた。

何か不機嫌そうだったけど…俺、何かマズイ事言つたかな？

…昨日の和にしても美都にしても、急に怒つたり不機嫌になつたりと女の子の感情の起伏つてわからないな。

「じゃあ、朝礼始めるべ。委員長『令ー』

「起立、礼」

『お願いしまーす』

「着席」

そして、今は朝礼の時間。

どうやら転入生がこのクラスにくる事は、既にクラス全員が知っているらしく、全体的に空気が浮ついている。

……ただ一部を除いて。

「ホントに『めんつて』

「……」

「反省してるから。許してくれ」

「……」

俺の横に、不機嫌オーラ全開の美都様がおられます。

いくら謝っても完全無視。

あれ?
このパターンどつかで…

あ…昨日の夜の和とのやり取りもこんな感じだったような。

つて事は、昨日桐生から教わったアレが使えるんじゃよし、早速実行だ。

「あのー 美都さん?」

「……」

「何でも直つ事聞きますんで、機嫌を直して下さいませんか?」

「… それホント?」

うわ、スゲー。

あんなに不機嫌だった美都が返事を返してくれた。

「ああ。ただし、無茶苦茶なのは無しな。できる事なら聞いてやる

よ

昨日の様な恐怖との闘いを防ぐ為に、あらかじめ予防線を張つておく。

同じ失敗は一度と繰り返さない。

ビーだ凄いだろー

…え？

女の子を不機嫌にさせたり怒らせてる時点で、偉くなんかない？

…ですよね…

「んーそうね。…今すぐ」パッと浮かんだモノじゃ何か勿体無い気がするから、しつかり考えてくるわ

「OK。わかった。でもなるべく早めにしてくれよ？」

「わかつてるわよ。それより冬夢、先生が転入生について話しているやつられて俺は、意識を前にいる先生の方に向ける。

「えー、みんな知っているだろ？が、このクラスに転入生が来る

「先生？転入生は女の子ですか？」

男子の中の誰かが、クラスの男子を代表して聞く。

「ああ、女子だ。しかもだな…喜べお前ら。物凄くキレイだ」

先生のその一言で、男子達が一気に殺氣立つ。

もちろん俺もその内の一人だ。

「よーし、じゃ入って来い」

そして、入つて来た転入生を見て俺のテンションは一気にクライマックスに…

クライマックスに…

なれなかつた。

周りが興奮して盛り上がっている中、俺はただただ自分の目を疑つた。

だつて入ってきたキレイな転入生は…

「音尾 和だ。よろしく頼む」

そう、和だつたのだ。

第5話 平和なんてモノは、所詮ハリボテ作りでしかない事を忘れるな（後書き）

誤字脱字や矛盾点などありましたら、「」報告よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第6話 人間の嫉妬から起きる行動程、怖いモノはない

「音尾 和だ。よろしく頼む」

男子の皆様が大はしゃぎしてゐる中、俺は呆然としていた。

知り合つた女の子が自分の学校に転入してくる、なんてシチュエーションはマンガなどの世界だけだと思っていたが…

まさかリアルに体験する事になるとは…

世の中、何が起じるかわからないな。

「音尾さん?どこからきたんですか?」

「好きな食べ物は何ですか？」

「彼氏いるんですか？」

男子は皆、鬼の形相で和に次々と質問をぶつけている。

和は確かに物凄くキレイだからな…

少しでも接点を探し出して、関わりを持ちたいのだろ。

「3サイズ教えて下さい？」

「もし彼氏いないなら、俺と付き合つて下さこ？」

「とにかく俺を罵つて下さい？」

…あれ…

何か、変態発言が飛び出してる奴がするのは
俺だけか？

「わかった。質問に答えてこいつ。前に住んでた所は、みんな知ら
ないような田舎だ」

おお、さすが和。ちゃんと神様である事を隠してる。

神様である事がばれたら大変な騒ぎになる事は火を見るより明らか
だ。

和がドジッ娘属性じゃなくてよかつた。

ドジッ娘は画面の中だけで十分だ。

…発言がキモい？？

…すいません…

「好きな食べ物は鶏のから揚げだ。あれを超える食べ物を、今まで私は食べたことがない。あのパリッとした衣に肉汁を含んだ柔らかい鶏肉。その2つが合わることによつて」

おーい、和。自己紹介じゃなくてから揚げの紹介になつてるやー。

やつ言つてやりたいが、もううん口には出せない。

口に出してしまつと俺と和が知り合つてある事がばれてしまつ。

そこから芋づる式にさあると、色々な事（和が神様である事や俺と同居してゐ事だ）がばれてしまつだろ？。

それだけは避けたい。どうしても。

特に同居なんかがばれた日には……。

俺を待ち受けているのは尋問　いや拷問か？

ああ……考えただけでも恐ろしそう。

「……冬夢。顔が真っ青よ。どうかしたの？」

「いや、だ…大丈夫だ」

俺が元の世界に帰つてくると、いつの間にか和の面白紹介は終わっていた。

「あくしょつ…あくしょつ…あくしょつ…」

「ああ…スゴイ!な」みんなの鋭い視線が気持ちいい…」

この世が終わったような顔で何か呟いているヤツと、自分の体を自分で抱いて身悶えてるヤツがいるが…

…一体、和のヤツ何て言ったんだ?

まあ想像はつくけどさ。

とうあえず、あの哀れ(?)な二人に祈つておくか。

なんか目の前に神様がいる中で祈るって変な気もするが…。

アーメン。

「それじゃあ、和は……」

どうやら先生は、和の座る席を探しているようだ。

男子が自分の横に座つて貰おうと必死にアピールしている。

「先生。俺の横が空いてますー。」

「ちよつと待てー。」這是俺の席だ。何勝手に俺をいなーものとして扱つてんだよー。」

「うつせーな。お前みたいなブサイクに席は必要ない。お前は一番後ろで正座してろ」

「なんだと『うーー』」

うわー。ケンカまで起きてるよ。

美少女の力って恐ろしいな..。

誰の横に座るかだけでこのザマだ。

もし、同居してる事がばれたら…

…拷問どひじや済まない。

親父、お袋…あんた達のせいで俺はこれから死と隣り合せで生きていかなくちゃなりそうだ。

「んーじゃあ、音尾。お前、一ノ瀬の横に座れ。一ノ瀬は一番後ろの窓側から一番目だ。机は掃除箱の横にあるからそれを運べ」

「わかりました。先生」

おお、和が丁寧語を使つてゐる。いつも男勝りな口調だから、なんか
斬新[…]。

つて、ちょっと待て！

和が俺の横に座る？

確かに、和と一緒に授業を受ければ嬉しい。だが、男子全員を
敵に回してまで受けたいか？、と聞かれると当然答えはノーだ。

俺は勢いよく立ち上がり、先生に抗議する。

「先生！勝手に決めないで下さい！」

「うわわー。お前に拒否権はない」

一瞬で切り捨てられましたよ。はい。

もう少し考えるとかあつてもいいだろ、先生。

「何だ？あいつ？」

「音尾さんが隣に座るのを拒むとか調子に乗つてゐるのか？」

「殺す。あいつ絶対殺す」

あれー…おかしいな。

男子を敵に回さない為に抗議したのに、殺氣を向けられていぬが。

つて事は、逆の事をすればいいんだな。

「わかりました、先生。音尾さん、いじりですよ」

ちなみに「寧語で話したのも名前を苗字 + さん付けで呼んだのも俺と和が既に知り合いである事を悟られないためである。

「…音尾さんと隣に座るとか…死ね」

「…音尾さんと隣に座るとか…死ね」

「…音尾さんと一緒に乗りやがって…死ね」

「…音尾さんと一緒に乗り出していく…殺す」

よしよし、これで殺意を向けてた男子も……つて……

……あれ？

何で？ 变わってない……

いや、むしろ殺意増してるような……

「俺を産んでくれた、お父さんお母さん。ごめんなさい。俺は今犯罪に手を染めようとしています。悪いのはわかつてます。でも、目の前のあれを始末しなければならないのです」

そう言つて一人の男子が突然、席から立ち上がる。

「やうだ。一ノ瀬を殺らない限り世界に平和は訪れない

「音尾さんを守るんだ！ みんな立ち上がれ！」

「　　「　　「　　オーッ　　」　　」　　」

何に感化されたかわからないが、男子が一丸となつて俺の席にジリジリと近づいて来る。

ちなみに、桐生は席に座って楽しそうに「カチ」を見ていた。

口パクで「頑張れよ」と言っているのがわかる。

……桐生……裏切ったな？

まあ、俺が桐生と同じ立場だったり同じ事してただろうか？

つて、そんな事をのんきに考えてる場合じゃない？

これは怖い……ガチで不気味だ。

だって、みんな田代が虚ろだし……やうにひわざのようになりかづくづく
咳いてくる。

……「このままじや殺されるー

生命の危機を悟った俺は、席を立ちダッシュで教室のドアに……

：行けなかつた：

もう既に、男子がドアを封鎖していたのだ。

クソッ。何でこんな時にだけこいつら団結力いいんだよ。

「みんな！かかれーつ！」

男子が俺に飛びかかるうとした正にその時！

「やめろーーー！」

和の声が教室に響き渡つた。

「貴様らー！集団で冬夢を襲おうとする事がどれだけ恥ずかしい事かわかつてゐるのか！」

いきなり始まつた和の説教に俺を含めた男子全員がポカーンとする。

「それでも貴様ら男か？本当の男なら一人で堂々とやれ！わかつたな？」

「　　「　　「　　」　　」

「わかつたな？」

「　　「　　「　　は　　」　　」

男子はみんなすゞすゞと、自分の席に戻つて行つた。

「…ふうー、助かった和。ありがとうな」

机を運び、椅子に座つた和に俺は言った。

「いや。当然の事だ。い、一緒に住む仲なのだからな」

「さうかもしれないが、それでも…っておい一何言つてるんだ！」

「？」

和は何がなんだかわからない、といった風に首を傾げる。

その姿はとてもカワイくて…

つてさうじやない。

俺は恐る恐る周りを見渡す。

男子全員がコツチを睨んでいた。

目が怪しく光っているのは、俺の氣のせこだと思っていた。

コレハヤバイ

俺はドアの所にまだ誰もいない事を確認すると全力ダッシュして…

しかし、その願いが叶う事はなかつた。

なぜなら…

「どう言つ事かシッカリ説明して貰おつかしら？」

俺の腕をガツシリと美都が掴んでいたからだ。

「何で美都が…何で美都が邪魔すーうわああああああー…！」

俺はこの後、地獄の方がマシではないか?、と思つてしまつ程恐ろしい尋問を男子全員 + 美都から受けるハメとなつた。

ところで、何で美都のヤツ…俺の邪魔したんだ？

第6話 人間の嫉妬から起きる行動程、怖いモノはない（後書き）

誤字脱字や矛盾点などありましたら、「」報告よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第7話 人の機嫌と言つものは些細な行動一つで大きく変化するから気を付け

ヒロイン3人目登場です。

第7話 人の機嫌と言つものは些細な行動一つで大きく変化するから気を付け

「ああ… よつやく昼休みだ…」

俺は、大きくそして深く溜め息をつく。

結局、男子全員 + 美都に捕まり、「和とどう言つ関係なのか?」と毎休み時間に散々問い合わせられたのだ。

ウソをついても、そのうちはばれてしまうと思い俺は和と同居している事を認めた。

流石に、神様である事は言えないので遠い親戚、と言つ事にしておいたが。

真実を話している時、男子達は殺意以上の何かがこもった視線を俺に浴びせかけてきたが、和の説教のおかげか実力行使にでるヤツはいなかつた。

ありがとう、和。君のおかげで尊い命が救われた。

いや待て…

和がいらない事を言わなければ…

こんな事は避けられたんだよな？

後でいらない事は喋らない様に、キツく言つておかなれば。

ないとは思いたいが、うつかり自分が神様だとばれてしまつたら…
それこそ収集がつかなくなる。

気を付けよ。

そんな事を思いながら俺は、弁当を鞄から取り出す。

ちなみに俺の通っている高校では食堂もあるのだが、毎日食堂だとお金がかかるので弁当を作っている。

料理はどうちかと言つと好きな方だし。

「ああー鳥の唐揚げが入つてゐるではないかーありがと、冬夢」

弁当のフタを開けた和が、目を輝かせる。

ホント、和のリアクション見ると次も美味しいの作つてやひつゝて思えるな。

「…」

そんな和を美都は不機嫌そつこじーつと見ていく。

「どうしたんだ? 美都?」

「…フンッ…何でもないわ」

せっかく機嫌を直す事に成功したのに、直した後すぐに本日2回目となる不機嫌モード突入してしまったのである。

何にも悪い事したつもりないんだけどな…

かと云つて、もう流石にあの方法は使えない。

さて、どうしたものか…

「一ノ瀬先輩！一緒に弁当食べましょーー！」

そう言つて教室に入つてくる女の子が目に入り、俺は美都の機嫌を直す方法を考えるのをやめる。

正直、俺一人では無理だ。

後で桐生に相談するとしよう。

…へタレおめりへ。

せつとけー！

とうあえず今は…

「いいやー中溝。今日も食べよつ」

教室に入つて来た女の子は高一の中溝なかみぞ和紗かずさ。

ソフトボール部のピッチャーをしている。

小学校の時からやつていたらしく、すでに試合に出でさせて貰つているんだとか。

「えへへー。ありがとひざれこめす、先輩。」

そつと中溝は、俺の前の席に後ろ向きに座り俺の机に弁当を置く。

「あー今日は唐揚げですか？ボクのトンカツと交換して下せー」

ちなみに、ボクつ娘である。

髪の毛がショートヘアで口調も男っぽく、また胸もペッた……スレンダーな為に、私服姿だと男に間違われる事もあるらしい。

また、告白していく人（女子も含む）が最近増えてきているらしく、困っているそうな。

中溝においても、俺の知ってる限り告白成功率は美都と同じく0%。

告白していく人の中には、一人くらいタイプがいてもおかしくないと思つが…

いやはや、モテる人の考えはわからないな。

ところで、何でこんなモテる女の子と一緒に弁当吃てるんだ?、と思つ人がいるかもしねないが、いうなつたのには色々とあつたのだ。

話したい気持ちは山々だが、長くなるのでまた今度。

「おう、イイダ。ほら

俺は唐揚げを中溝の弁当のフタの上にのせる。

「あつがとうござりますー先輩の唐揚げ……えへへ…嬉しいです

「せつか?まあ、喜んで貰えてよかつた

先輩の部分を、強調したような気がするが…気のせいかな。

「ところで先輩」

「ん? 何だ?」

「先輩の隣にいる方は先輩の知り合いですか? 見かけない顔ですね」

「ああ、和の事か? こいつは今日から転入してきたんだ。ほら和、自己紹介」

「音尾 和だ。今日からこの学校に転入してきた。よろしく頼む」

「ボクは中溝 和紗です。こちらこそよろしくお願いします。…それより先輩、どうして今日転入してきたばかりの音尾先輩を名前で呼んでるんですか?」

そう言ってニコニコと笑いかけてくる中溝。

カワイイ後輩の笑顔を見るのは嬉しい。
目も笑ってくれるともっと嬉しいのだが…

仕方なく、俺は和と同居している事を話した。

ウソをついたところで、どうせみんな言ふらすので、ばれるのは目に見えているからだ。

「そうなんですか。音尾先輩と同居ですか。…これは対策を練らないとダメだね…」

中溝は、ブツブツ言いながら食べてる途中の弁当を片付け始めた。

「どうしたんだ？ 中溝」

「用事を思い出しまして…先輩方失礼します。後、榎本先輩に音尾先輩、ボクは絶対に負けませんからね」

最後に意味不明な言葉を残し、中溝は教室から出て行つた。

3人で、何か勝負でもしてるのだろうか？

でも和と中溝はついやつき知り合つた訳だし。

んー、わからん。

しかし、和と美都には通じたらしく2人とも険しい顔をしている。

「なあ2人とも、あれどいつこいつ意味なんだ?何か勝負でもしてるのか?」

「…冬夢、アンタ鈍^{ヂカ}い」

「同感だ。冬夢は女心を理解してないやうだ。少しは^{アラカル}べきだ」

「お、おひつ」

質問に答えてくれる^{アリ}か、なぜか怒りってしまった。

なんで?

「ねえ、冬夢。何でも^{アリ}事聞^{アリ}て朝に^{アリ}たわよね?」

「え?…ああ、確かに^{アリ}たな」

急に話が変わった為に、少し反応がおくれてしまつ。

「じゃあ…今日の夜^{アリ}飯^{アリ}と、冬夢の家で食べさせて…」

そつ^{アリ}の美都の顔は^{アリ}してか、ソンゴのように真っ赤つかった。

「ああ。別に構わないぞ」
たいして断る理由もない（断れない立場にあるのだが）ので、俺はOKする。

「ホント？ ホントに？」

「ああ、もちろんだ。言つただろ？ 何でも言つし事聞くって。別に構わないだろ？ 和？」

「……ああ……冬夢が約束した事だからな……仕方ない……」

「和？」

「冬夢の『』飯を…出来たてで食べれる…フフッ」

美都の機嫌が直つたっぽいのは嬉しいが、次は和が落ち込んでいる。

「… 一体どうすればいいんだよ…」

思わず頭を抱えてしまふ俺であった。

第7話 人の機嫌と言つものは些細な行動一つで大きく変化するから気を付け

誤字脱字や矛盾点などありましたら、ご報告よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第8話 ラノベやマンガのよつて元に想い立つたりすぐ部活を作れる程、学校の想

ヒロイン4人目登場です。

第8話 ラノベやマンガのついでに立ったりぐる部活を作れる程、学校の想

「起立、礼」

「「「ありがとうございましたー」」」

先生のムダに長く意味のない終礼が終わり放課後。

俺の体力は色々ありますから近かつた。

回復薬？ポーション？

んなモノとっくに使い果たしたよ。

ホントならこのまま真っ直ぐ帰って、ベッドへ倒れ込みたい気分なのだが残念ながらそれはできない。

したくてもできないのだ。

それはなぜか。

…そりゃ部活だ。

休めばいいじゃないかと思うかもしれないが、俺が行かないと迷惑
がかかるのだ。

頼りにされるって大変だね。

「じゃ美都、また後でメールする」

「え、ああ…わかったわ。また後でね」

俺は美都にそりゃって教室を出た。

「クソ……桐生のヤツ……逃やがった」

廊下を歩きながら俺は呟く。

放課後に桐生と朝見捨てた件について、じつへつと「お話」しようと考えていたのだが、どうやら俺の考えはお見通しだらしく、わざわざと部活に行ってしまった。

変に勘がいいからな、桐生は。

といひで和はどうに行つたかと言つて…

「女子剣道部を見学してくるー。」

とやけに興奮した感じで女子剣道部員と一緒に剣道場に行つてしまつた。

しかし、長い黒髪 + 美少女 + 巫女服が似合つ + 剣道つて…

ホント、マンガのヒロインみたいなヤツだ。

普通、こんな特徴持ったヤツ現実にはいないぞ。

まあ、神様に人間の常識は通用しないか。

そんな事を考へていつに部室前にたどり着く。

正確には部室ではなく、家庭科調理室なのだが。

これで俺の所属しているクラブ名がわかつただろ？

そう…

「料理部」だ。

なぜ男である俺が、料理部に入つたか？

これにはちゃんとした理由があるのだ。

前にも言つたように俺は一人暮らしである。

つまり、食事は全て自分で作らなければならない。
当然、献立も自分で考えなきゃならない。

そこで料理のレパートリーが増やせればいいなと思い、料理部に入部したのだ。

抵抗はあつたが腹に背は変えられないし、1年も経つとなれてしまつた。

しかし、大きな問題点が一つ。

それは…

「…ちょっと遅れたかな？」

「大丈夫ですよ、先生。私以外まだ来ていませんから」

そう、料理を教えてもらう為に料理部に入つたのに、いつのまにか先生と呼ばれ教える立場になつてしまつたのだ。

最初の方は顧問の先生（家庭科を教えている若い女の先生）が教えていたのだが、俺が先生よりウマく作れてしまつた為、俺が教える

ハメになってしまった。

まあ、教えるのは楽しいし別に構わないんだけども。

「部長、まだみんな来てないのか？」

「ええ。今のところは一ノ瀬君と、私だけです」

料理部部長、水沢麗奈は微笑を浮かべながら言つ。

部長は、大人しい人で誰に対しても敬語を使つ。

本人いわく、日頃敬語で話す機会が多い為クセがついてしまったとの事。

この変なクセからもわかるように、部長はお嬢様である。

部費が全くいらないのも部長が全て負担してくれているから。

いやーありがたやありがたや。

部長もモテるのだが、「好きな人が既にいますので」と言つて全て断つているらしい。

と言つても、部長が告白したなどと、この話は聞いた事がないので充分相手をなるべく傷つけないように配慮して言つてこる嘘なのだろう。

後、部長は俺と同じ高校である。

「それよりも、一ノ瀬君。私の事は部長ではなく、名前で呼んで下さい」と何回も言っていますよね？私にも水沢麗奈とこの名前がちやんとあるんですよ

「ああ、やうだつた。何だか慣れなくてな…悪い水沢」

「……」

「水沢？」

水沢は顔を赤く染めボーッとしていた。
どうやら俺の声も届いていない。

何でこうなった？

「おーい水沢ー」

「……」

「水沢ー聞こえてるか？」

そう言つて俺は軽く水沢の肩を揺らした。

「ひやうーい、一ノ瀬君？」

「おかえり、水沢。よつやくコッチの世界に帰つてきててくれたか

「……一ノ瀬君がキチンと名前で呼んでくれてるなんて幸せです…」

「水沢、何か言つたか？声が小さくて聞こえなかつたんだが

俺がそう聞くと水沢は顔を柿のように赤くし、大きく両手を振りつつ

「な、何でも、何でもないですよ。それより準備しましょう。い、
一ノ瀬君も手伝つて下さいね」

と言ひ家庭科準備室に早足で行つてしまつた。

「あ、ああ」

取り残された俺はただ水沢の後を着いて行くしかなかつた。

「じゃあ、今日はチヨンチップクッキー作つてみよつか」

「「「はい、先生」」

「その先生つてのやめてくれ。何がムズムズするから

「「「はい、先生」」

「帰つていいか?」

「「「は…いいえ、一ノ瀬君」」

「それでいいんだよ。じゃ早速作つて行くぞ」

「「「はーこ」」

ちなみに部員は幽霊部員状態の先輩達を除くと12人。

その中で11人は女子である。

つまり、男子は俺1人なのだ。

最初は、女子独特の雰囲気に多少辟易したが今ではもう慣れてしまった。

水沢担当に入部しようとする男子がたまにいるそつだが、そういうのは全部水沢本人が直接断っている。

また、女子でも断る事がたまにある。

理由は「これ以上ライバルは増やしたくないのです」との事。

ライバル?何のこっちゃ?

そう思い聞いた事があるのだが、ウマくはぐらかされ教えてくれなかつた。

「まず始めに、薄力粉にココアパウダー、ブラックパウダーを泡立て器でしつかり混ぜてくれー」

俺は意識を料理に戻し、部員のみんなに手順を教えて行った。

「じゃあ今日はこれで終わる。ありがとうございました」

「「「ありがとうございます」」」

調理が終わり、俺は急いで家庭科調理室を飛び出した。

思いの外、後片付けに手間取りクラブ終了時刻をやや過ぎてしまつたのだ。

いつもなら気にする事はないが今日は美都が食事に来るので。

それに和もいる。

ちなみに和にはメールで、遅くなるから先に帰つておいてくれ、と伝えてある。

後、どれだけお腹がすいても料理だけはするな、とも伝えてある。

家に帰つて見たら、あるのは家の形をした真っ黒な炭でした…

なんて事は避けたいからな。

「あ、あの…」ノ瀬君

「ん?」

後ろから声をかけられ振り返ると、そこには水沢だった。

なぜか俯いてモジモジしている。

「どうした? 水沢?」

「あ、あの… よかつたら… その… 一緒に帰りませんか?」

「んー…ああ、いいよ」

「本当ですか！…ありがとうございますー。」

そう言つて水沢はペココと頭を下げる。

「ヤバいまだしなくても…」

そんなこんなで2人で料理について話しながら帰つていると、校門前に見覚えの顔がいるのを発見する。

「どうしたんだ？中溝？一人で突つ立つて」

「ああ先輩！待つてたんですよ。一緒に帰りたくて。ダメですか？」

「俺は別にいいぞ。でも、水沢が…」

「いいですよ、一ノ瀬君。私は水沢麗奈です。一ノ瀬君の所属する料理部の部長です」

ん？

俺が所属しているって言わないといけない事か？

料理部部長である事だけ言えばいい様な気がするが…。

しかもやたらと強調されてたし。

「はじめまして、水沢先輩。中溝 和紗と申します。一ノ瀬先輩とは、毎日飯と一緒に食べさせて貰っています」

「いつも同じく、俺と毎日飯を食べてるってわざわざいつ事か？」

更に同じく、やたらと強調してたし。

「それはさうと先輩

「ん？」

しばらくの沈黙の後、中溝が話しかけてくる。

「今日、榎本先輩が一ノ瀬先輩の所に晩飯を食べに行くんですよ
ね？」

「どうしてそれを？」

確かあの約束をした時、中溝は教室から出て行つた後だつたよくな…

中溝は俺の疑問に答える事なく、話を続けて行く。

「それで、ボクも御一緒にしたいんですけど…いいですか？」

「ああ、いいよ。食事は多い方が楽しいからな。用意ができたらメールするから、それまで家で待機しといてくれ」

「ありがとうございます先輩…」ううむちやいられない！先輩、ボク用意があるので先帰ります」

やつぱり中溝はタッショウで帰つていった。

…一緒に帰るんじゃなかつたのか？

「まあいいや。それより水沢、お前も一緒に晩ご飯食べないか？」

「え？え？わ、私が一ノ瀬君の家でし、食事ですか？」

急に話しかけられたからかあたふたしている水沢。

「嫌だつたか？」

「いえ、そんな事はないです…とても嬉しいです」

「じゃあ、せつきも中溝に言つたが用意ができたらメールするから、自宅で待つてくれ」

「わかりました！」

そう言つて水沢はカバンからケータイを取り出し、誰かに電話をし始めた。

2言3言話すと水沢はケータイをしまい、俺にこう言った。

「私も準備をしなければならないので、これで失礼します」

「失礼つて、今から一緒に…」

俺はその続きを言ひ事ができなかつた。

なぜなら、目の前にいかにもお嬢様専用と言つたりムジンがいつの間にか止まつっていたからだ。

おいおい…

連絡してまだ1分も経っていないぞ…

この車、どこで待機してたんだ？

俺が呆然と立ち尽くしている中、水沢は俺に微笑みかけながら車に乗り込み、帰つて行つた。

「さて……帰るか」

俺はさみしく、一人呟いた。

第8話 ラノベやマンガの勢いで連れて立つたばかりに部活を作る程、学校の想

誤字脱字や矛盾点などありましたら、「報告よりおこへお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第9話 恋する女の心の気持ちは複雑なんです（前編）

投稿が遅くなり申し訳ありません。

今日はヒロイン視点です。

第9話 恋する女の心の気持ちは複雑なんです

「冬夢の家で食事……冬夢の家で食事……」

私、榎本 美都は自分で言うのも何だが、正直浮かれていた。

冬夢の家で食事なんて……果たして何年ぶりかしり……

私の記憶が正しければ、確か小学校4年の時に食べたのが最後のはずだ。

あの時は冬夢の『両親が作つて下せつた料理だつたが、今回は違つ。

そつ……冬夢の手料理を食べられるのだ。
しかもできたての。

「ウフフ……」

そう考えただけで自然と顔がにやけてしまつ。

「でも……」じんなにライバルが増えるなんて……予想外だつたわね……」

着て行く服を選びながら、私は呟く。

後輩の中溝 和紗に料理部部長の水沢 麗奈、そして……

冬夢と同居していると書かれた親戚の首尾 和。

「だ、大丈夫よね……冬夢に限つて……いくら同居してるとほいえ……音

「尾さんと…まあ、間違いを起しちゃうつた事はないはずよね…だつてあの鈍さだし…」

冬夢の鈍さは筋金入りである。

自分に好意を抱いている女子が複数人いる事によるで気付いていいのだ。

少しばかず女心と並んでモノを学んで欲しいのだが…

女心を理解して欲しくないと思つてゐる自分がいるのも確かである。

女心を理解する。

つまり、それは私やその他の女子が冬夢に対して抱いている気持ちを理解されるのと同じ事。

それが恐いのだ。

その時に冬夢がどんな反応をするのかが恐いのだ。

もし私が選んでくれず、他の女子を選んだら…

そつ考えただけで、胸がギュウと轡掴みされたように痛くなり泣きたくなってしまう。

それなら早く告白してしまえばいい、という人がいるかもしない。

しかし今、冬夢の中で私の位置付けは残念ながら「幼馴染」止まりである。

つまり私の事に恋愛感情を抱いていないのだ。

告白したら、冬夢の事だから付き合ってくれるかもしねい。

それでも、もしかしたらムリかも…と悪い方に悪い方に考えてしまうのだ。

情けないと、意気地なしだと自分でも思つ。

でも…

「つて何、私暗くなつてるのよ。音尾さんがいとはいえ、冬夢の家で食事なんだから明るくなくちゃダメよね。それに冬夢のベクトルが私に向いてないなら、向かせればいいだけ。他の子には負けないわ」

そう言って私は頬を軽く叩く。

そうだ。

クヨクヨしている暇があるなら、フられるのが怖いなら、冬夢に好きになつて貰えるように、絶対にフられないように頑張ればいい。

冬夢は鈍いから確かに大変かもしね。

それでも私は諦めない。

だつて私は…

「冬夢の事が大好きだから」

「へへへ」

「お姉ちゃん、ご機嫌だね」

「そうかな？」

「だつて物凄く嬉しそうな顔して、鼻歌歌つてるんだもん。誰だつてわかるよ。どうしたの？」

「実は今日、一ノ瀬先輩の家でご飯食べるんだ」

「一ノ瀬先輩つて…確かにお姉ちゃんの大好きな人だよね？」

「だ、大好きッ？」

ボク、中溝 和紗は思わず声を裏返らせる。

そりやそうだ。

いくら弟（名前は秀明^{ひであき}と言った）とはいえ、急にそんな事を聞かれたら普通は驚く。

「お姉ちゃん、顔真っ赤だよ」

秀明が意地悪そうに笑う。

「もー秀明のバカ！」

反論できないのが悔しくて、ボクは自分の部屋に逃げるよつに向かう扉を強く閉めガギもかけた事を確認して、ボクはどうとため息をついた。

「はあ…先輩に頼んだ時は気が付かなかつたけど…先輩の家で食事つて…物凄いイベントだよね…」

そうなのだ。

他のライバルがいるにしても、先輩の家で先輩の作った料理を先輩

と一緒に食べる、と云つ事実に変わつはないのだ。

「 もう緊張してきやがつたよ…」

先輩の家に行つた事は一度だけある。

でもあの時は、玄関までしか入つていない。

しかも、先輩の事を意識してなかつたのだ。

今回とは条件が違います。

「 あー何着て行けばいいんだろう?」

ボクはもう寝起きながら、クローゼットを開ける。

そこにはヒラヒラのスカートなどカワイイ女の下っぽい服…

…などではなく、ジーパンやチェックのブラウスなど男の子っぽい服ばかりが並んでいて…

「ボクには男の子っぽい服が似合うのはわかってるんだけどな…」

やつぱり好きな人には女の子らしい所を見せ付けたい訳で…

「でも、スカートなんて…似合わないし…て言つか…そんなの持つてないよ…やつぱり…ボクは女の子っぽい魅力ないのかな…」

そんな感じで、悩んでいるヒドアの向こうから秀明が話しかけてきた。

「お姉ちゃん、もしかして着る服で悩んでるのー？」

「うん、まあね」

「わー…『じゅね姉ちゃんの事だから、女の子っぽい所を見せ付けたいの』…とか考へてるんでしょ？」

「ビービービーでわかったの？」

「何年弟やつてると思つてるの？一歳だよ、一歳。これだけ長い事やつてたら単純なお姉ちゃんの考え方わかるよ」

「単純って…」

弟にそんな事を言われるとは…何だか悲しくなつて来る…

「お姉ちゃん、ムリに着飾る必要ないんじゃない？」

わざわざまでのふざけた感じから一変して真剣な声で言つてくる。

「自分がじゅねをアピールした方がいいよ。ムリして女の子っぽくしなくともお姉ちゃんには他にも魅力的な所、沢山あるんだから」

「ホントっ？」

「ホント。弟の言つ事を信じなよ」

「……あつがと、秀明」

秀明の言ひ通りかもしれない。

ムツをして女のナツモくする必要は…

……つて…

「よく考えてみたらそれ何のフォローにもなってない！結局、ボクに女のナツモしがないから他の所で勝負しりつて事でしょ！」

「あ、ばれた？」

そいつって走つて逃げて行く音がドアの向こうから聞こえてくる。

「……でも、必ず振り向かせて見せますからね。先輩」

ボクは力強く呟いた。

生まれてこの方、一度も異性の家に訪問した事がないのだ。

一ノ瀬君に食事に誘われたのはいいのだが……

私、水沢 麗奈は戸惑っていた。

「一ノ瀬君の家での食事……びっくりしているのでしょうか？」

しかも、他に女の子がいるとはいえ、いきなり異性と食事である。

異性は異性でも、相手がどこにでもいる普通の知り合いなどだったなら、ここまで悩んだりはしなかつただろう。

誘ってきた相手は…先程も言ったように一ノ瀬君なのだ。

そう、私の好きな一ノ瀬君なのだ。

「どんな感じの服を着て行けばいいのか…何か持つて行くべきなのが…全くわからないです…」

そこで、私は机の上に付いているボタンを押す。

これを押す事で…

「失礼します、お嬢様。いかがなされましたか？」

執事である米道を呼び出せるのだ。

「今日、一ノ瀬君の所へ」飯を食べに行く、と言つ事はお話しましたよね？」

「はい。確かに聞きしました」

「それで、今用意をしているのですが……」いつの事は初めてなので…どうすればいいのかわからなくて……」

「それで私を？」

「はい」

そつと米道は顎に手を当て、何やら考えて始めた。

そして、しばらくして

「失礼ながら、一ノ瀬様はお嬢様の想い人でいらっしゃられるのですよね？」

と聞いてきた。

「え、ええ… そう…… です」

「でしたら、お嬢様」

そう言って、米道は一ノ瀬と微笑む。

「お嬢様のお好きな様にするのが一番かと」

「私の好きな様に… ですか？」

意味がイマイチわからず、私は思わず聞き返す。

「はい。確かに私はこの様な場合で、どの様にすれば良いのか知つております。そして、お嬢様にお教える事も可能でござります。しかしお嬢様。それでは一ノ瀬様に見て頂くのは… 言い方が悪いかも知れませんが、私の作り上げたお嬢様になってしまいます。一ノ瀬様にはお嬢様が自分自身で考えて、見てもらいたいお姿を見て頂くべきかと」

「でもそれで失敗してしまったら… 一ノ瀬君は私の事を嫌いになつ

てしまふかもしません。それが嫌なのです

「お嬢様はそう仰つておりますが、いつも私がお嬢様から聞いておりまます一ノ瀬様はその様な事でお嬢様を嫌いになつてしまわれる程、冷たい方ではないと思われますが？仰つていていたではありませんか。一ノ瀬様の優しさに惚れました、と」

「確かに……そうでした。一ノ瀬君は心優しいお方です」

そうだった。

一ノ瀬君は私がどんなに料理で失敗してどんなに迷惑をかけても、また部長としての仕事を手伝つて欲しいと頼んでも、決して嫌そうな顔はしなかつた。

いつも笑顔で許してくれ、手伝ってくれた。

一ノ瀬君はそう言つ人だった。

「ありがとうございます、米道」

「いえ、執事として当然の事をしたまでです。それでは私はこれで失礼させて頂きます」

米道は深々と一礼し、私の部屋から出て行つた。

「見てもらいたい私…ですか」

私は咳きながら、クローゼットからお気に入りの白いワンピースを取り出す。

「一ノ瀬君、私頑張りますから」

そう言って、私は小ちく握りこぶしを握つた。

「へへしょん?へへしょん?へへしょん?」

「どうした、冬夢? 風邪か?」

「こや…違つ違つ。もしかしたら酔われてるのか?」

「冬夢が? それ」「違つだわ!」

「…ヒドい事言つた…まあいいや。用意もできたら、みんなでメール送つておくれか」

第9話 恋する女の心の気持ちは複雑なんです（後編）

誤字脱字や矛盾点などありましたら、『報知新聞』へお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第10話 食事をする人数が多ければ多い程、樂しくなると言つわけでは必ず

いきなりだが、俺は食事と言つのは楽しむべきだと思つている。

ただ出されたモノを口に運び、噛み、そして飲み込む。

それだけじゃホントに「食べた」とはいわない。

五感をフル動員するのは当然で、もし他の人がいるのなら、料理の感想を言いあつたり取り止めのない会話をしたりする。

このように楽しむ事で、初めて「食べた」と言えるんぢゃないか？

だから正直な所、和と一緒に住むとなつた時、俺は嬉しかつた。

なんせ中学の時から、家ではずっと1人で食事してたからだ。

まあ一人でじつづくと食べるのも、色々な発見があつて楽しかったが。

それでもやつぱり他の人と一緒に食べる楽しさには敵わないワケで…

今晚、美都がご飯を食べに来る事になり、それならもつと呼んでもつと楽しい食事にしようと思つたのだが…

「じゃ、料理できたから今から運ぶよ」

「せんぱーい、ボクもうお腹ペコペコですよ」

「一ノ瀬君がどんな料理を作つてくれたのか楽しみです」

「当然、唐揚げはあるだろ?」

「はあ…」

びつしてか、美都のテンションは低かった。

「ん？ どうしたんだ？ 美都？ 何か元気がないみたいだが…」

気になつて俺は美都に聞く。

「ねえ… 夢、薄々答えはわかってるけど聞かせて貰うわね。どうして水沢さんと中溝さんがここにいるのかしら？」

俺の質問を完全にスルーして、逆に美都が聞いてきた。

口調はとても穏やかで、笑顔なのだが…

… どうしてだろ？… 目は全然笑つてないし、有無を言わさなによつて威圧感が言葉にこもつている。

「い、いや… だって… 大人数で食べた方が楽しいかなあ… と思いましてですね…」

威圧感に圧され、詰まりながらも俺は何とか答える。

幼馴染相手に敬語口調になつてゐる所は…まあ、察してくれ。

「はああああ～」

美都は盛大にため息をついた。

おい、美都。ため息つくと幸せ逃げ行くぞー。

前までは、「こんな迷信あるわけない、とか言って信じなかつた。

しかし今は神様がいると判明してゐるわけで…もしかしたらため息ついたら幸せをリアルに神様か何かに奪われるんじゃないかと考えてる。

…やっぱり考えすぎか。

和いわく、神様がみんなチート能力ありつて訳ではないらしいし…。

「覚悟は決めてたけど…」の鈍さには毎回毎回呆れさせられるわね

「ホント、ボクも苦労させられますよ…」

「でも、鈍いからこそ起きるいい事もあるぞ？」

「確かにそれは言えます。要は私たちの接し方次第で、いいように悪いようになるって事ですね」

俺が変な事を考へてゐる間に、4人は楽しそうに笑いながら話していた。

内容はイマイチ理解できないが…。

美都が機嫌を直してゐるのでよしとしよう。

「ほら。簡単なモノしか作れなかつたが、その辺は許してくれ」

そう言って、テーブルに出したのは鍋に入ったカレー。

やつぱり大人數で食べるなら、これしかないよな。

カレーが嫌いって言う人はまずいないし、食べる量を自分で調節できる。

辛さを誰かに合わさないといけないのが、唯一の欠点と言えば欠点だ。

ちなみに今回は、女の子が「」と云つてある。

俺は辛口が好きなのだが……」は女の子に合わせないとな。

「」飯は自分でついてくれ。ルーは俺がつぐから。後、福神漬けも各自で頼む

「それはわかつたが……冬夢よ、唐揚げはないのか？」

俺に「」飯の入った皿を手渡しながら、和が聞いてくる。

「いや、流石に2日連続で唐揚げは……と思つてな

「… そうか…… ああ、唐揚げカレー食べたかった……」

そう言って和はガックリと肩を落とす。

なあ、和よ…

… お前、どんだけ唐揚げ好きなんだよ…

今日の弁当にも入れてやつただろ？

しかも、実は弁当の中に入れた唐揚げの数、和の方が俺のより1コ多いんだぞ？

それでも貴女はまだ唐揚げが食べたいと？

もう完璧に中毒だな、これ。

早急に治療する必要があるんだ。

しばらく唐揚げはお預

ん?

チヨツト待て。

考えるんだ俺。

唐揚げジャンキー和から唐揚げを取り上げたとしよう。

当然、和は唐揚げを手に入れようとするとどうだろう。

ここまでではいい。

問題はどうやって唐揚げを手に入れるか、だ。

入手方法は大きく分けて2つあるだろう。

?どこかスーパーなどで唐揚げを購入する

?自分で唐揚げを作る

?は全然OKである。

買つてくる量が常識範囲内であれば、の話だが。

市販の唐揚げって意外と高いからな…。

そして?の自分で作る。

そう…これが大問題なのだ。

和が料理を作る。

これはキッチン、最悪の場合は家が消失する事を意味する。

お粥作るだけで土鍋1つが犠牲となるのだ。

油を使う唐揚げを和が作つたら…

…確実に只事では済まなくなる。

料理がへタな女の子って萌える、などとバカげた事を言っているやつらは和が料理している横に立つてみる。

料理下手がどれだけ危険で恐ろしい存在かが、よくわかると思つ。

俺は和が唐揚げを作ると~~三月三日~~ DEAD END直行のイベントを避ける為に、和に言つ。

「和、今日はカレーでガマンしてくれー明日絶対に唐揚げ作つてやるからな?」

「おおー明日、唐揚げ作つてくれるのか?絶対だぞ!」

和は嬉しそうに頷きながら、席に座つた。

よしー

任務完了だ！

これで俺の家が消失すると云つ事態は未然に防がれた。バンザイ！

しかし、この調子でいくと…気付けば3食全部唐揚げと言つ事態になりかねない。

唐揚げは飽きにいく、と前にテレビでやっていたが…

うん。

3食全部唐揚げって…

もつそんなレベルじゃないよな…。

「一体どうしたものかなあ……」

「どうしたんですか？一ノ瀬君。私でよければ相談にのりますよ？」

『飯の入った皿を持った水沢が聞いてくる。

『どうやら俺の独り言が聞こえてしまつたようだ。

「いや、大丈夫。他人に相談する程、深刻な問題じゃないから」

唐揚げ中毒をどうやって治療するか…なんてアホらしい事、いくら部活仲間とは言え相談できない。

へタすれば「家消失END」か「3食全部唐揚げEND」になる、

リアルに深刻な問題なのだけども…

「本当に大丈夫ですか？私、相談にのりー」

「せんぱーい、まだですかー？ボク、もうホントにお腹ペコペコなんですよー」

「ねえータ夢、いつまで待たせるのよ？」

水沢の声を遮つて、中溝と美都が聞いてきた。

「あ、すこません」

「おお、悪かつた悪かつた

まあ…何とかなるんじゃないかな？

俺は解決策を考えるのを諦め、3人の皿にカレーを入れた。

「じゃ、 いただきます」

「 「 「 いただきまーす」」」

久々に大人数で囲む食卓。
いやはや、 嬉しいね。

発言がおっさんくさい?

ほつとけ?

「 」「 これは…」

和が大きく目を見開いてカレーを凝視していた。

「何か変なモノ入つてたか？」

「いや、違う。ウマすぎて驚いていたのだ。最高だぞ、このカレー」

「そ、そうか。そんなにウマいか？俺の作ったカレーは？」

「はい！ボク、こんなにおいしいカレー食べたの初めてです！」

「とてもおいしいです。これ…ルーも手作りですよね？」

「流石、料理部部長だな。甘口のルーを作るのは初めてだから…上手くいくか不安だったんだが…」

俺がそう言つと美都は呆れたようこ、いつ言つた。

「ルーも手作りなの？冬夢、あんたって凄いのね。後で私にも作り方教えてくれるかしら？」

「作り方は企業秘密。ルーをあげる事ならできるどな

ちなみに、このルーを完成させるのに3年の日を費やした。

え？

この暇人が！、って？

「うるせー！」

それだけ俺の料理に対する愛情は…

…何、恥ずかしい事言つてんだよ…俺。

「ホント？くれるの？」

「ああ。作り過ぎたからな。帰りに渡すよ

「あーボクも！ボクも欲しいです！」

「私も欲しいのですが…」

「冬夢、私も欲しい！」

「ああ、全然OKだ。和以外は、な。和にはキッチンに立たせないと心に決めているから、料理材料は絶対に渡さない」

「ヒドい…ヒドい…冬夢…」

「ユドーのは和の方だーお粥を作りつとして土鍋をー

「バ、バカ！それをみんなの前で言つなー！」

俺の声を遮るよつこ、和が大声で怒鳴つてくる。

やつぱり恥ずかしいのだろう。顔は真つ赤だった。

「一ノ瀬先輩。その話詳しく教えて下せーー。」

「わかつた。実はなー」

「ど、う、む？？？」

「ちよ、ちよつと音尾さんー冬夢にフォークを投げよつとしないの
！」

「あらあら～」

「水沢さんー笑つてないで音尾さんを宥めるの手伝つてー。」

やつぱり食事は大人数の方が楽しい。

俺はそう思う。

第10話 食事をする人数が多くれば多い程、楽しくなると云つわけでは必ず

誤字脱字や矛盾点などありましたら、『報告』よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3030z/>

神様 に入りました。

2011年12月28日22時47分発行